Ｎｏ．５０４【２０２２年５月１３日配信】

文芸誌『座標』と柿崎守忠（担当：村上亜弥）

こんにちは。歴史資料室の村上亜弥です。

私は５月８日（日曜日）、青森県立図書館で開催された第１回あおもり文学ゼミ「1930 年『座標』創刊―県下統一の夢―」に参加しました。『座標』とは昭和５年（1930）から昭和７年まで青森で発行されていた文芸誌です。この雑誌の誕生には、昭和 38 年から昭和 54 年まで青森県知事を務めた竹内俊吉が深く関わっています。

柿崎守忠
（『青森市写真名鑑』青森県観光株式会社　1955 年）

竹内は昭和初期には東奥日報社に勤務し、『東奥日報』の付録として発行された『サンデー東奥』の編集を担当していました。竹内はその『サンデー東奥』の紙上で「県下を統一した文芸雑誌」を発刊することを提唱しています(昭和４年９月 22 日付『サンデー東奥』)。これを受け、県内で発行されていた８つの文芸誌が統合して誕生したのが『座標』でした。

『座標』の常任編集委員は当初、淡谷悠蔵、柿崎守忠、一戸玲太郎（謙三）、川崎むつを、竹内俊吉が務めていました。この中で私が関心を持った人物は柿崎守忠です。柿崎は大正 14 年（1925）に東京高等師範学校を卒業し、青森中学校や青森県女子師範学校の教員を務めた教育者です。また、昭和 20 年７月から昭和 21 年 11 月まで青森市長を務めたことでも知られています。

『座標』に統合された雑誌『黎明』を発行していた淡谷悠蔵は、柿崎について「『黎明』時代から文芸講演会の講師などを引き受けて呉れた知識人」と紹介しています（『黎明・座標のころ』文芸協会出版　1975 年)。つまり、柿崎は昭和初期の青森県の文壇で重要な役割を担っていた人物でもあるのです。

柿崎は昭和３年から４年にかけて、新町尋常小学校教員の藤田金一らと『猟騎兵』という文芸誌を発行しています。この雑誌には柿崎の教え子だった太宰治と阿部合成も参加しました。青森県近代文学館で開催中の企画展「『座標』に集った人々展」には二人の作品が掲載された『猟騎兵』第６号（1929 年発行）が展示されています（但し、太宰は小菅銀吉という筆名を使用)。その後『猟騎兵』は『座標』に統合され、柿崎は『座標』の編集に携わることになるのです。

小菅銀吉という筆名を使っていた太宰治
（国立国会図書館「近代日本人の肖像」より）

青森県近代文学館の企画展「『座標』に集った人々展」は５月 15 日（日曜日）まで開催されています。淡谷悠蔵、太宰治、船水公明、高木恭造ら青森市ゆかりの文学者に関する貴重な資料が展示されていますので、ぜひ足を運んでみてください。

※今回の内容は第１回あおもり文学ゼミ配付資料、『「青森に生きる」竹内俊吉×淡谷悠蔵対談集』（毎日新聞青森支局　1981 年）などを参考にしました。